様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2015
課題番号：２６５８００２６

研究課題名（和文）映画がたどる高齢者介護の４０年間　１９７３～２０１３年

研究課題名（英文）The Caring for the Aged in Films, 1973-2013

研究代表者
今泉　容子（IMAIZUMI, Yoko）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：４０１５１６６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は日本の「高齢者介護映画」に着眼し、つぎの２つの成果をあげた。まず、1973年の豊田四郎監督『恍惚の人』から今日までの高齢者介護映画において、「高齢者患者と介護者の人物造形」と「彼らを取り巻く社会環境」を検証したこと。これによって、日本の高齢者介護の「映像表象史」が構築できた。つぎに、2000年代に入って盛んに制作されている外国の「高齢者介護映画」をパースペクティヴに入れ、「日本」の高齢者介護表象との比較考察を行い、日本独自の高齢者介護表象を浮き彫りにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This project explored the way the aged patients were depicted in Japanese films in 1973-2012, focusing on changes in the relationship between the patients and their carers. It also pursued a comparative study of Japanese films and various overseas films, such as British, American, Indian, and Chinese films, in order to clarify the characteristics of the Japanese way of representing the aged patients.

研究分野：人文学　芸術学　芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：映画　高齢者　患者　介護者　老老介護　母娘関係　福祉施設

## １．研究開始当初の背景

本研究が対象とするのは、高齢者介護をテーマとする映画作品群であった。わたしはそれまで、「老い」をテーマとした映画研究を実施していた。映画に描かれた「老い」のさまざまな側面を考察するうちに、「介護」のテーマに辿り着いたのである。身体や記憶がほころびかけた高齢者が介護されるとき、映画のなかにはどのような人間関係や社会環境が描き出されるのであろうか、という問いを発し、本研究の構想を少しずつ練り上げていった。

「高齢者介護」は人生の避けがたい局面として、多くの映画のなかに描かれている。本格的な「高齢者介護映画」は、1973 年に日本で制作された『恍惚の人』が、世界初の例であったが、日本映画が辿る高齢者介護の変遷を本格的に考察した研究は、まだ存在していなかった。そうした状況において、本研究は高齢者介護映画における家族像・社会像の変遷を明らかにしながら、「高齢者介護映像表象史」を構築すること、という研究の達成目標を定めた。

それと同時に、2000 年代に興隆した「外国」の高齢者介護映画にも目を向け、日本と外国の高齢者介護映像表象を比較分析することも、本研究のパースペクティヴに入れた。外国映画は高齢者介護のテーマを日本のように系譜的に描き出しているわけではないが、いくつかの国において高齢者介護映画の制作が意識的に試みられている。そうした国は 6 カ国に及び、二つのグループに分類できることがわかったため（①英語圏のアメリカ、イギリス、カナダ、②アジア文化圏の中国、韓国、インド）、本研究においてもそうした外国映画における高齢者介護のありかたを、日本映画の場合と比較することを計画した。

こうした計画をもつ本研究は、映画研究における高齢者介護ジャンルの探求であると同時に、「映画研究」と「老年学」を交差させた「学際的領域」を新たに開拓しうるものとして、開始されたのであった。

## ２．研究の目的

高齢者介護は喫緊の取り組みが必要とされる課題である。福祉が発達している北欧でも、まだ多くの着手すべき問題が残されている。高齢者介護が今後、どのような形をとっていくのかは、まだ明確になっていない。介護離職など未解決の取り組みが多い高齢者介護を、世界に先駆けて本格的にスクリーン上に描き出したのが、日本である。本研究は「日本の高齢者介護映画」に着眼し、つぎの２つの目的を達成しようとした。

(1) 1973 年の本格的作品の第 1 号となる『恍惚の人』（豊田四郎監督）から今日までの高齢者介護映画を対象とし、「高齢の患者とその介護者の人物造形」と「彼らを取り巻く社会環境」を検証することで、日本の高齢者介護の「映像表象史」を構築すること。

(2) 2000 年代に入って盛んに制作される「外国」の高齢者介護映画をパースペクティヴに入れ、（１）で解明した「日本」の高齢者介護表象と比較考察を行うこと。そして、「日本」と「外国」の高齢者介護をめぐる「家族像」や「社会像」を比較分析し、日本独自の高齢者介護表象を浮き彫りにすること。

## ３．研究の方法

「高齢者介護」は現実においても、映画においても、重要な課題として確実に定着している。北欧における高齢者福祉はよく知られているが、北欧にかぎらず高齢者介護にたいする各国の意識は高い。ところが、高齢者介護の「映画」に関するかぎり、研究は皆無に等しい。研究対象として活用されてこなかった「高齢者介護映画」に、初めてスポットライトを当てて、日本映画における高齢者像を解明するところに本研究の斬新さがあったのであり、その研究は以下の方法によって実践された。

まず、日本の高齢者介護映画を収集したあと、それらにショット分析をほどこしながら、

1973 年から今日までの「患者像／介護者像」の変遷や「高齢者介護を取り巻く社会環境」の変遷を検出していった。

つぎに、日本映画にほどこしたショット分析と同じ分析を、選定した 6 カ国の外国映画にほどこし、同じように「高齢者介護」を映画のなかに検証していった。外国映画の場合は 2000 年に入ってから高齢者介護映画の制作がはじまったため、歴史と呼べるものが 10 年そこそこしかない。しかし歴史（時間）の長短も、比較の一要素とみなした。

具体的に分析した外国の高齢者介護映画は、高齢者介護映画の制作に意欲的な 6 カ国から選定し、それらを 2 グループに分類しながら研究を進めた。2 グループとは、①英語圏のアメリカ、イギリス、カナダ、②アジア文化圏の中国、韓国、インドであった。

最後に、日本の高齢者介護映画の考察から得られた結果と、外国の高齢者介護映画の考察から得られた結果を比較しながら、高齢者介護というテーマに関して日本が特色ある独自の映画づくりを実践していることを明らかにしようとした。

## ４．研究成果

日本の高齢者介護映画において、高齢者患者と介護者の人間関係が、時代の変遷にしたがって大きく変化していることを突き止めた。

その「患者像／介護者像」に関して、初期の日本映画では、患者はいつも高齢の「男」であり、彼を介護する者はいつも女（義理の娘）であることが明らかになった。日本の高齢者介護映画の金字塔である『恍惚の人』（1973 年、豊田四郎監督）に、それは明確に見て取れた。

ところが、1980 年代の終わりに大きな変化が起こり、高齢の「女」の患者が出現しはじめることも、明らかにできた。介護者にも変化が起こり、患者の配偶者（男）か縁者（男）となったのである。すなわち、患者は女、介護者は男になったのである。じっさいに考察した映画は、1980～90 年代の『花いちもんめ。』（1985 年、伊藤俊也監督）、『人間の約束』（1986 年、吉田喜重監督）、『男はつらいよ 寅次郎サラダ記念日』（1988 年、山田洋次監督）、『老人 Z』（1991 年、北久保弘之監督）、『病院で死ぬということ』（1993 年、市川準監督）、『大病人』（1993 年、伊丹十三監督）、『午後の遺言状』（1995 年、新藤兼人監督）などであった。

このように、とつぜん男・女の逆転が起こったことを検証したが、ジェンダー論は高齢者介護表象の考察には欠かせないこともわかった。

2000 年代になると、アカシアの道』（2001 年、松岡錠司監督）、『折り梅』（2001 年、松井久子監督）、『Firefly Dreams　いちばん美しい夏』（2001 年、ジョン・ウィリアムズ監督）（2001 年）、『そうかもしれない』（2006 年、保坂延彦監督）、『殯の森』（）などの映画作品に見られるように、患者像は９割を「女」が占めるが、介護者像は病院・介護施設のスタッフも加わり、複雑に多様化してきたことを明らかにした。社会環境の一要素としての「介護施設」は、高齢者介護映画の初期にも登場していたが、その意味を大きく変化させていることが立証できた。初期には、患者をベッドに縛りつけ、残酷な仕打ちをする恐怖の空間が出現したが、今日では患者のクオリティ・オブ・ライフを重視し、その個性や潜在能力に合った介護を実践する施設が登場する。高齢者介護の日本映画が現在、目指している方向を要約する台詞が、『折り梅』の施設の先生の口から発せられるが、それは「ひとは、だれかに認められていると思えなければ、生きていけません」というものであった。

このように変貌する「患者像」「介護者像」「家族像」「社会像」を、日本の高齢者介護映画の小史にまとめあげた。

外国の場合も、同様の分析を行ったが、日本が辿った道とは大きく異なることが明らかになった。

日本は 1973 年に高齢者介護映画で先陣を切ったが、英語圏では高齢者が華々しく勝ち誇る映画が、高い比率を占めてきた。「強い高齢者」を映画の主人公にした例は、『ハロ

ルドとモード』『フライド・グリーン・トマト』『グラン・トリノ』『人生に乾杯！』『カルテット！人生のオペラハウス』など、数えはじめたら切りがない。しかし 2000 年代になると、外国でも「介護される高齢者」を描く映画が意識的に制作されはじめる。具体的な作品として、『アイリス』(2001 年、イギリス)、『アウェイ・フロム・ハー　君を想う』（2004 年、カナダ)、『やさしい嘘と贈り物』（2008 年、アメリカ）などが挙げられる。そうした英語圏の映画は、グループ①として分類したのであるが、日本映画の 1980～1990 年代の特色を色濃く表現していることがわかった。

英語圏の映画のグループ①と異なる傾向を示すアジア件の映画はグループ②として分類し、『女人、四十』(1995 年、中国)、『私はガンディーを殺していない』(2005 年、インド）などを考察した。それらの映画群は、1970 年代の日本の高齢者介護映画の特色を有していることも、解明できたのである。

このように外国映画を日本映画と比較考察することによって、独特の高齢者介護表象を展開させてきた日本映画の特徴を浮き彫りにした。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

(1) 今泉容子、「映画に描かれた人生――1990 年代～2000 年代」、『地域研究』第 35 号、2014 年 3 月、101-124 頁。査読有り

(2) Ima-Izumi, Yoko, “The Alzheimer’s Patient in Films of the Pacific Countries,” *Proceedings, 2014 Hawaii International Conference on Arts and Humanities* (Honolulu, Hawaii: HICAH Committee, 2014), pp.602-613. ISSN#: 1541-5899　査読有り

〔学会発表〕（計　１件）

(1) Ima-Izumi, Yoko, “The Alzheimer’s Patient in Films of the Pacific Countries,” Hawaii International Conference on Arts and Humanities, Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort, Honolulu, Hawaii, U.S.A., January 11, 2014. 査読有り

## ６．研究組織

(1)研究代表者

今泉　容子　（IMAIZUMI, Yoko）
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：４０１５１６６７